

歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第二巻「文化財編」は平成一八年度末に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思えます。

今回は、「自然編」第四章「植物と植物」から日野町内の植物について紹介します。

植物分布の交点 日野

日野町には国の天然記念物に指定されている植物として、鎌掛のホンシヤクナゲ、熊野のヒダリマキガヤがあります。ホンシヤクナゲは一般的に標高一千メートル前後の高山に分布する植物ですが、鎌掛では低地に大群落が生じています。また、ヒダリマキガヤは種子表面の縦線が左に巻くカヤの変異種です。これらが、植物学的に貴重だということで天然記念物に指定されています。

天然記念物以外では、馬見岡綿向神社（村井）の「千面松」、照光寺（内池）の「蓮如桜」、金峯神社（蔵王）の「かば桜」、養泉寺（音羽）の「八房梅」、正法寺（鎌掛）の「後光藤」など、歴史的な由緒をもつ名木も多くあります。また、熊野神社（熊野）の

「タコスギ」をはじめとするスギ、日枝神社（大窪）の「夫婦檜」、本誓寺（日田）のクロマツなどの巨木・老木も見られます。特に「タコスギ」は幹周囲が約七・五メートルもある推定樹齢約六百年の老木で、スギとしては県下屈指の大木です。

このように、町内には学術上貴重なもの、歴史が刻まれたもの、自然の神秘を实感させられるものなど、様々な樹木があります。ところで、町内には何種類の草や樹木があるのでしょうか。最新



▲コショウノキ



▲ワタムキアザミ

の調査（過去の記録を含む）によると一六四四種が確認されています。この数は県内で確認された約二五〇〇種の約六五％にあたり、日野町は多くの植物が分布しているといえるでしょう。特に、これまで県内未確認のコショウノキやヒナノシヤクジョウなどが発見されています。

日野町は日本列島のほぼ中央に位置し、太平洋にも日本海にも面していません。また標高は一四三メートルから一一〇メートルと高低差が大きく、山地、丘陵、平

地と変化に富んだ地形です。このような理由から、町内には西日本と東日本の植物、太平洋側と日本海側の植物、北方系冷温帯と南方系温暖帯の植物が混在し、その結果として多種多様の植物が見られます。特に、綿向山は西日本と東日本の植物分布境界で、例えばスズシロソウの東限やトウゴクミツバツツジの西限となっています。さらに鈴鹿山脈固有種であるウスギナツノタムラソウや伊勢湾周辺だけに分布するワタムキアザミなども見られます。

県内の植物を詳細に調査した『滋賀県植物誌』という本があります。その中心的役割を果たした一人が、十禅師の橋本忠太郎さんです。橋本さんは、滋賀県の植物研究に多大な貢献をした方で、県下の天然記念物調査に携わり、ワタムキアザミなどの発見者でもあります。「鎌掛のホンシヤクナゲ群落」などが国の天然記念物に指定されたことは、橋本さんの尽力によるといっても過言ではありません。

なお付録CD-ROMには、植物のカラー写真のほかに、日野町の植物、帰化植物、巨樹・老木、貴重種、葉草の目録なども収録されています。植物に興味のある方はぜひ参考にご覧ください。